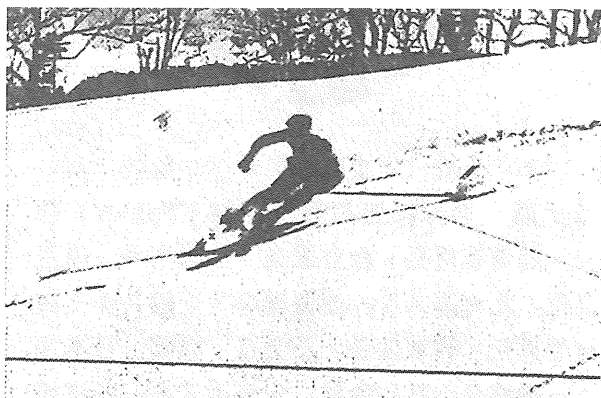


うに語っています。

——第1回の指導者の養成講習会ですが、検定会の名はついていなかった。私は技術員などの役員ではなかったので、本来そこに行くべき立場ではなかったが、同年6月、高橋次郎先生宅に呼ばれ「一般スキー術要項」は出したが、教えることがマチマチで、教える形、スタイルは別々で困る」と打ち明けられ「12月に新しい指導者を作るから手伝ってくれ」と言われた。～中略～10人ほど合格証を受けましたが、私の名前は無かった。翌年のスキー年鑑の端の方に合格番号28番と載った。昔から全日本は色々と不合理なものがあるんですね。——

——私は当時、テンポシュブング（ゼロースシュブング、強い前傾姿勢）の言葉が入ってきた時代に“かなり高い姿勢で天狗山の壁を、大体3回位のログターンで降りる滑り”を高橋先生が見て「サンアントンのペルノー・リビッカにそっくりだ。おまえは誰から習ったんだ?」、「いや、写真なんか見て独りで考えてやっている」——

と、高橋検定委員長から助手に指名された経緯についても語っています。



当時（昭和15年頃）、既に現代に通じる技法で滑っていた柴田信一先生

「第2回指導者検定講習会」は、同一年度内の昭和15年3月、長野県野沢温泉で行われ、以後毎年、会場を複数にして開催していましたが、戦争のため、昭和17年度で途絶えました。

戦後、北海道では昭和22年3月、小樽天狗山にて「指導者章検定講習会」として再開され、以後、毎年合格者が十数人を超えるようになり

ました。

昭和27年、指導員の数が100名以上になり、本協会の前身「北海道一般スキー指導員会」が発足しました。

このことにつきましては、発足時の幹事でありました栗林薫先生は、「これはあくまでも親睦団体であって、会員相互の和を深めることが目的であったが、当初はいわゆる政・指未分化の点が無い訳ではなかった。それは“一般スキー技術委員会”のスタッフが殆ど指導委員会の役員を占めている事でもうなずける。」と、後に述べています。

昭和59年9月、高橋次郎・柴田信一両先生のスキー界、特に一般スキーに尽くした功績を後世に伝えるべく、北海道スキー指導員会（昭和62年名称変更）が主となり「顕彰碑建立期成会」を結成して、全道の指導員会支部、スキー関係業者等に呼びかけ予算を上回る協賛金を賜り、昭和60年5月、小樽天狗山スキー資料館に両先生のレリーフを掲げました。

そのレリーフには、当時の栗林薫会長が記した碑文が誌されています。（次ページ）

昭和14年の「第1回指導者検定会」を原点として、昭和27年に発足した本協会は、途中活動中断はあったものの、70年近くの歴史を刻んでいます。

その間、健全なるスキー界の発展に寄与すべく「スキーの普及発展」、「会員相互の親睦と研究交流」の目標を掲げ、森信之氏、佐藤久哉氏等による講演と懇親の“指導者協会の集い”、技術研究、準指合格者随想、各加盟団体日より等掲載の“機関誌シュプール”発行、道連や本協会事業報告の“HP”、そして道連教育本部からの受託事業“春スキーの集い・スキルアップ研修会”等の事業を展開しています。

しかしながら昨今は、会員の減少が大きな問題となっています。が、「指導員会のメリットは？」と聞かれる。物質的なものだったらSAJの組織に入りたい。我々アマチュアは、社会体育に奉仕する喜びと、我々の後から続くであろう指導員のために、よりよいスキー指導の環